16世紀におけるイベリア勢力のアジア進出と日本像の変容
——黄金の国ジパングから銀の国ジャパンへ——

高　橋　　保

Ⅰ．はしがき

わが国の名が中国史料中においてまず倭国として現われたことは周知のところである。この名称が唐代におけるムスリム商人の中国進出によってアラブ世界に伝わり、9世紀以降のアラブ文献ではワクワク Wāqwāq として知られた。

一方、その唐代に日本からの遣唐使が携行した国書でわが国を日本国と自称したことから、新たにこの日本国という名称が中国に知られた。この日本国の中国北部方言での発音 Ji-pen-kuo に基づいて、元代中国に滞在したイタリア人マルコ・ポーロ(Marco Polo)がわが国をジパング(あるいはチパング)[1]の名でヨーロッパ世界に伝えることになった。

マルコ・ポーロによってヨーロッパに伝えられたジパングは、黄金に満ち溢れた国であった。マルコ・ポーロの『世界の叙述』、通称『東方見聞録』には、

「この国(チパング)ではいたる所に黄金が見つかるものだから、国人は誰でも莫大な黄金を所有している。……この王国の一大宮殿は、それこそ純金ずくめで出来ているのです。我々ヨーロッパ人が家屋や教会堂の屋根を鉛板でふくように、この宮殿の屋根はすべて純金でふかれている。したがって、その値打ちはとても評価できるようなものではない。宮殿内に数ある各部屋の床も、全部が指二本幅の厚さをもつ純金で敷きつめられている。このほか、広間といわず窓といわず、一切が全て黄金造りである。」[2]

と書かれている。

ここに描かれている内容が、わが国の実態と異なることはいうまでもないが、だからといってこうしたジパング＝豊かな黄金の国としてのイメージは、決して全てがマルコ・ポーロの幻想の所産であったという訳では決してない。それは多分に歴史的事実、すなわち日本からの遣唐使節や遣唐僧が砂金を持参したり、朝貢品や商人の貿易品のなかに金銀蒔絵の調度品や倭扇を含んでいたことなどから、唐宋時代以来の中国沿岸地域の中国人の間に日本に対して産金国としてのイメージが広がっていたことは否定できなく、マルコ・ポーロは彼が滞在した13世紀後半当時のこうした中国人のイメージを、彼自身の想像をも加えて、かなり誇張した形で伝えた、というのが実相に近いと思われる。

いずれにしても、マルコ・ポーロ自身が一度もジパングを訪問してその実相に触れることなくして、このジパング＝黄金の国のイメージを作り出したことは確かである。

ところが、16世紀に至って、ヨーロッパ諸勢力、とくにその先頭を切ってポルトガルやスペインといったイベリア半島諸勢力が東アジアに進出し、日本にも到達してその実態に触れることになると、当然ながら日本に対するヨーロッパ人のイメージも変容をせまられることになった。本稿は、そうした16世紀のヨーロッパにおける日本イメージの変容過程と新しい日本のイメージとはどのようなものであったか、という点について検討しようとするものである。

II. スペインのインディアス進出とジパングの探索

黄金の国ジパングに到達することは、15世紀当時のヨーロッパ人にとって大きな夢であった。イタリア人コロンブス(C. Columbus)もその夢にとりつかれた一人であって、マルコ・ポーロの『東方見聞録』を読んで大いにジパングあるいはそのジパングの位置するインディアス(＝アジア)到達への夢をかき立てていた。

コロンブスが1492年８月、スペイン王室の承認と支持を得て、いよいよ未知の土地へ向って西航することになったが、その船出に際してこの航海の主要目的地の一つとして念頭においていたのも、黄金の国ジパングにほかならなかっ

た。彼が地理学者トスカネリから与えられた地図では、イベリア半島から大西洋を西へ航海すれば、ジパングという大きな島に行き当ることになっていた。そしてその先にはカタイ(中国)のあるインディアスの大陸がある筈であった。ヨーロッパとジパングの間には、障害となる島や大陸は存在しないことになっていたのである。

サン・サルヴァドル島をはじめとする島々を"発見"し、現在のカリブ海水域に到達したコロンブスは、すでに自分がジパング周辺の多島海に入ったものと考え、すぐさまジパングの探索を始めている(3)。コロンブスは、少し変った島があると、それが皆ジパングに見えたようである。彼は初めエスパニョラ島(現在のハイチ)をジパングかと考えたが、期待していたような黄金の山はどこにも見つからなかった。しかし、航海した距離からみて、彼はすでにジパングの近くに到達していることを確信し、その附近一帯をインディアスとし、現地住民をインディオと名付けた。

1493年9月、第2回航海に出発したコロンブスは、小アンティル諸島を経由してエスパニョラ島に帰り、さらにキューバ南岸の沿岸航海を行なってジャマイカ島にも接触した。このとき、コロンブスはキューバがジパング西方にあるインディアス本土のマンジ(南部中国)だと考えた。彼はこの航海でカリブ海の島々の形を、自分の信じる東アジアの地形に一致させようと努力している。

第3回航海は1498年5月末に開始され、このときコロンブスは初めて南アメリカ本土に到着した。すなわちトリニダ島から現在のベネズエラのパリア湾に沿って航海したのである。南アメリカ大陸にぶつかった彼は、それまでの自分の知見にはない新しい土地を見出したと感じた。すなわち、彼がマンジに比定した東インディアスが、はるか南に向って巨大な大陸塊を形成していると考えたのである。こうして出来上った彼なりのインディアス=アジアの地理像では、その陸塊の向うにインド洋に連なる大海(シヌス・マグヌス)があって、そこに香料諸島があると判断した。

そこで彼は、1502年の第4回航海では、東インディアスの大陸塊の向う側にある大海に入って香料諸島やインドに到達するための水路ないしは海峡を探すことを目的として、中米地峡部をホンジュラスからパナマまで沿岸航海したの

であった。しかし、コロンブスが目指した海峡はどこにも見つからなかった。

コロンブスは1506年5月、失意のうちに死んだが、彼は死ぬまで現在の西インド諸島のハイチ島をジパングだと信じていた。

16世紀に入って、スペイン人は彼らが新たに"発見"した大陸がインディアス＝アジアではないことを認識するようになると、ジパングの位置についても再考を迫られることになった。そこで初期の或る人々は、ジパングをその新大陸の一部を指したものと考えたりもしたが、のちには次第にジパング島を新大陸の西方の大洋、すなわち現在の太平洋中に存在すると考えるようになった。この大洋の広さや形を人によって様々に想像したので、ジパング島も、あるいは新大陸寄りに、あるいは大洋の中ほどに、あるいは西方のインディアス大陸に近く、またあるいは赤道の南あるいは北に、と種々の形をもつ大島として、当時の諸地図に描かれている。

16世紀初当時のスペインでは、ポルトガルに対抗して、西廻りによる香料諸島への早期到達を主目的とし、そこへの接近が繰り返し試みられていたのであるが、なおジパングへの関心も捨て去られてしまった訳では決してなかった。したがって、1520年になって、あのマゼラン指揮下の船隊が南アメリカ南端にある海峡を発見し、翌1521年にヨーロッパ人として初めて太平洋を横断したとき、同行者の一人であるピガフェッタが、「われわれは非常に富裕な二つの島からほど遠からぬ辺りを通過した。ひとつは南緯20度にあるチパングという島であり、……」(4)と、南緯20度にあるジパングという島の近くを通過したことを記録したのである。しかし、香料諸島への関心で一杯だったマゼランは、この島の探索を行なわなかった。つまり彼は折角ジパング島の近くを通ったと信じながら、そこに立ち寄ってみようとはしなかったのである。ジパングに対する興味がスペイン人の間でかなり薄くなっていたことがわかる。このマゼラン船隊は、その後フィリピン諸島(マゼランはここで死亡した)やモルッカ諸島を経て、アフリカ南端廻りで、翌1522年に18人というごく小人数のみがスペインに帰着し、最初の世界一周航海完成の栄誉を担うことができた。

しかし、その後もスペインでのジパング島への興味は捨て去られなかった。香料諸島を目指して1525年に出発したロアイサ指揮の船隊の一船は、翌1526年

に北緯14度から15度の辺りでジパング島を探索して失敗したと、帰国後にスペイン国王に報告している[5]。また同じ1525年にスペイン国王カルロス5世がイタリア人セバスチャン・カボットを船団長に任じ、香料(モルッカ)諸島向けに船隊を送り、同時に未知の国々を発見させるという勅令を与えたが、その勅令の中にジパングの探険を命ずるという一項が入っていた[6]。残念ながら、この船団は南アメリカまでしか到達せず、航海は失敗に終った。

このように、ヨーロッパから西航したスペインは当初からジパングを探究するのに非常に熱心であったのであり、新大陸の存在が知られたのちに到っても、当初に比べてその程度は著るしく下るものの、依然としてこの「黄金の島」への関心を持ち続けていた。

これに対して、ヨーロッパから東航してアフリカ大陸を廻り1498年にはインドに到達し、そこに根拠地を設けたのち、さらに1511年にはマラッカ海峡の要衝マラッカを占領し、そこからさらに東方の香料諸島や北方の中国へと進出していったポルトガルは、当初から香料諸島に対して大きな関心を寄せており、ジパングに対してはほとんど無関心であった。

それにもかかわらず、スペイン人が太平洋上に想定したジパングよりも、現実の日本がはるかに中国の近くに位置し、且つこれと交渉があったために、日本の"発見"(初来日)という点ではついにポルトガル人が先行することになった。しかし彼らポルトガル人はマラッカ占領後も日本には無関心であり、これを探索しなかったので、マラッカ占領後30年近くを経てようやくにして、しかも偶然の機会から、日本を"発見"することになったのであった。

もしジパング探究に熱心なスペインがポルトガルよりも早く日本に到達していたら、日本とヨーロッパの関係は実際とはどれ程か違った形になっていたかも知れないし、或いはまた日本(Japan)の名称もジパングと似た他の名称で呼ばれるようになっていたかも知れない。

III. ポルトガルのアジア進出と日本情報の入手

(A) マラッカ占領後に得た日本情報

ポルトガル人がマラッカを占領した当時、彼らは中国人とよく接触していたことは勿論であるが、その他ではその時までマラッカにやってきて盛んに通商していた琉球人について聞き伝えており、これをレキオス(Lequios)ともゴーレス(Gores)とも呼んだことが明らかである。しかし、あまりマラッカ方面に来ていなかった日本人については、特別の情報もなく、したがって関心をもっていなかったらしい。

ポルトガル人が確実に耳にした日本の風評は、ポルトガル人トメ・ピレス(Tomé Pires)がゴアやマラッカで1511年から1515年ごろまでに書いたと思われる『東洋諸国記』のなかに記録されている。そこでは、日本はジャンポン(Jampon)と呼ばれており、同書では日本の記事は中国、琉球の記事の次でブルネイの前に置かれている。この書物で、日本は次のように描かれている。

「全てのシナ(中国)人の云うところによると、ジャンポン(Jampon)の島はレケオス(Lequios)の島々よりも大きく、その国王はより強力で偉大である。それは商品にも自然の産物にも恵まれていない。国王は異教徒で、シナの国王の臣下である。彼ら(ジャンポン人)はシナと取引きすることは稀であるが、それはシナから遠く離れていることと、彼らがジャンコを持たず、また海洋国民でないからである。レケオ人は7、8日でジャンポンに赴き、上記の商品を携えて行く。そしてそれを黄金や銅と交換する。レケオ人のところからマラッカへ来る物は皆、レケオ人がジャンポンから携えて来るものである。レケオ人はジャンポンの人と漁網やその他の商品で取引きする。」(7)

この記事から、我々は考察すべき二つの問題を見出せるように思う。すなわち、その第1は名称の問題である。ここには日本を呼ぶのにジパングではなくてジャンポンと書かれているが、それは何故であろうか。第2の問題は、記事内容において、かつての黄金に満ちた豊かな国というイメージとは全く異なり、日本をして辺境の一小農業国としてのイメージをもたせる内容になっているが、それは何故であろうか、ということである。これら二つの問題は相互に関連していると思われる。

まず、名称の問題について考えてみよう。

トメ・ピレスの『東方諸国記』の英訳者であるポルトガルのアルマンド・コルテザン(Armando Cortesão)氏は、Jampon がマレー語より来たとし、その根拠としてユール(H. Yule)の所説を挙げている。そのユール氏は著書 *Hobson-Jobson* の Japan の項において、「(マルコ・ポーロの旅行記が出た)14世紀と(ポルトガル人が来航した)16世紀とでは、その間にヨーロッパにおける(この Japan の語の)伝承に明らかな(時代の)隔りがあるから、我々(イギリス人)もしくはむしろポルトガル人がマラッカの貿易商人からマレー語の形でこの語を伝承したことに疑いを容れることができない。クロフォード(J. Crawfurd)は、それ(マレー語形)を Japung および Japang としている。」[8]と記述している。現在まで Japan の語源について触れた多くの学者は、このマレー語語源説を踏襲しており、日本学者として著名なドイツのシュールハンマー(G. Schurhammer)師などもこの説に従っている[9]。

しかし、この Japan＝マレー語語源説には大きな難点があることは岡本良知氏によってすでに指摘されており[10]、成立し難いように思われる。すなわち、その理由として、ユール氏がその所説の根拠としているような14～16世紀の間にマレー商人がこの Japung の称呼を使用していたという事実がいかなる史料にも見出せないことである。しかも、ユール氏がその研究に拠っているクロフォードのこの問題についての所説は、ユールの述べるところとは全く異っており、クロフォードは、マレー語の日本を呼ぶ称呼(Japung)はポルトガル語を介して採り入れられたものであり、それはポルトガル人が日本に通商を開いた後のことだとしているのである(J. クロフォード『東インド群島事典』1851年刊)。ユールがクロフォードの所説に拠ったとすれば、彼はわざとクロフォードの見解を逆に解釈したといわなければならない。したがって、ユール説は史料的根拠に基づかない全く彼の想像による見解だといわざるをえない。ユール説に従った学者は皆その誤りを踏襲しているにすぎないのである。

問題は結局、トメ・ピレスの記事の情報源は何かという点に帰するように思われる。トメ・ピレスは『東方諸国記』に記述した日本記事の冒頭に「全てのシナ人のいうところによると」と書いていた。このことからみて、トメ・ピレスの日本関係記事の情報源は中国人であったとみられる。しかし、その中国人

とは、マラッカに来ていた中国人貿易商人たちで、彼らからトメ・ピレスが聞いたとも解されるし、また一方、ポルトガルはマラッカ占領後すぐに香料諸島方面とともに中国方面へも進出を試み、1513年には初めて広東湾口のタマン島(屯門澳)に到達し、翌年の冬の北風を利用して同(1514)年末にはマラッカに帰着している事実があるので[11]、トメ・ピレスのいう中国人とはその中国渡航の際ポルトガル人が広東で出会った中国人であったとも解され、それら中国人から入手した日本関係の情報を、マラッカに帰ったポルトガル人がトメ・ピレスに伝え、トメ・ピレスはその情報を当時執筆中の『東方諸国記』に採り入れた、と解することも可能である。

まず前者の場合についてみると、先にも触れたように、ポルトガルのマラッカ占領当時、同地での琉球についての情報はある程度知られていたものの、日本に関する情報は殆んどなかったようであり、中国商人から聞いた形跡もない。マラッカ占領直後に、ポルトガル人たちが多くの現地情報を本国に向けて、報告書や書簡の形で送っているが、そのどれにも日本の国名や国情についての情報は含まれていない。以上のことから考えて、マラッカで日本情報を入手した可能性は少ないといわざるをえない。

したがって、トメ・ピレスが書いた日本記事は、1513年に中国に赴いたポルトガル人が中国で入手した情報に基づいていると解すべきこととなる。その情報は、かつてマルコ・ポーロが伝えたジパングとは関係なく、1513～14年当時広東の中国人の間に伝わっていた日本情報であったのである。

トメ・ピレスが記録した日本国名としての Jampon は、以上のことから類推して、当時の広東方言などに拠るものであろうと考えられる。事実そのことを裏付ける発言をしているポルトガル人研究者が、早い時期にいた。すなわち、1577年から1610年まで34年間日本に滞在し、その間に長崎の耶蘇会版の『日本語文典』を書き、『日葡大辞典』を編纂したジョアン・ロドリゲス(João Rodriguez)が、1610年にマカオへ去ってから1634年までの間に書き上げた『日本教会史』のなかで、

「シナ人は、この日本(ニホン)あるいは日本(ニッポン)という名を、彼らの云葉でジョプエン Jopuen と発音し、福建・広東の卑俗語ではジポン Jipon と

なる[12]。これから、ポルトガル人が、この東方のその他の言葉や固有名詞に対してなしたのと同様に、それを訛ってジャパン Japão という名を得た。」[13]

と書いているのである。

Japão がポルトガル語になってから100年も経たない時期に、広東沿岸のマカオに住んでいたポルトガル人学者がこのように断言しているのであって、Jampon が広東方言から採られたことは間違いないであろう。それが記録となって現われた最初のものがトメ・ピレスの『東方諸国記』に他ならなかったのである。

したがって、このことから筆者が先に掲げた二つの問題のうちの第2の問題、すなわち日本の国情についてのマルコ・ポーロの記述とトメ・ピレスの記述の相違といった点についても、自ずから解答が見出されよう。両記事はその情報を異にしていたのであり、日本人との接触もなくその情報も少なくて多分に想像を加えて書いた前者の記事よりも、時代的にも新しく倭寇など日本人や琉球人との接触を通じて確実性も増していた沿岸部中国人情報に拠った後者の記事の方が、より日本の実情に近いものであったことは容易に推察されるところである。

(B) ポルトガル人初来日の年次

1513年を皮切りに、その後ポルトガル人たちは毎年のように中国沿岸地方に赴いて中国商人との間にいわゆる密貿易活動を展開したが、中国のはるか東方にある島国日本に対してそれほど興味をもっていなかったらしい。中国人を通じて入手した情報では、日本は中国よりはるか東方に隔った場所にあり、またその国には彼等の欲しがる香辛料や絹とかがあまりないということだったので、わざわざそんな所まで出掛けるという意欲が沸かなかったのであろう。

しかし、偶然のことからポルトガル人は日本を"発見"(初来日)することになる。3人のポルトガル人がシアム(Siam)の港から中国船に乗って中国に向けて航海中に暴風雨に遭って流され、偶然にも九州南方の種子島に漂着した、というのが日本との接触の始まりであった。この時、ポルトガル人が鉄砲をはじめて日本に伝えたことは余りにも有名な史実である。

しかし、このポルトガル人初来日の年次については、従来1543年とする日本側記録(南浦文之『鉄炮記』)と、1542年とするヨーロッパ側記録(ディオゴ・デ・フレイタスの情報に基づくガルヴァン『新旧発見記』中の記事)と、どちらを採るかによって、学界にも意見が分れていた。主として日本側学者が1543年説をとることが多いのに対して、欧米学者の間では1542年説をとる者が多いという情況にあった。しかし、近年に至って欧米学者の間でも1543年説をとる学者が次第に増加する傾向にある。それは有力な日本研究者であるシュールハマー師が1542年説を排して1543年説を発表したことが大きく影響している。

そこでいま、シュールハンマー師の1543年説を岸野氏の整理に従って、紹介してみよう(14)。同師の1543年説は3つの論拠に立っている。

第①は1542年説の論拠となっていたガルヴァンの記事の否定である。シュールハンマー師はその理由として、ガルヴァンは事件後長期間を経た後に同事件について書いたので、原資料のフレイタス情報にある1542年の琉球"発見"を翌年の日本"発見"と混同したのだ、と考える。

情報提供者であるフレイタスは1544年8月マラッカを発ってモルッカ諸島のテルナテに向っている。この日付から逆算すると、彼はおそくとも1544年2月にシャムからマラッカへ来ていなければならない。このことから、シュールハンマー師はフレイタス情報にみえるポルトガル人の2回の琉球行きを逆算し、第1回目を1542年、第2回目を1543年とし、前者を琉球"発見"年としている。

第②に、シュールハンマー師は1543年初来日説成立の根拠として2つの史料を挙げる。その第1は南浦文之の『鉄炮記』にみえるポルトガル人初来日に関する記事で、それには詳細な漂着の日付、上陸地点、人数、名前を示しており、その史料的価値は高いとしている。第2の史料はフランシスコ・ザビエル(Francisco Xavier)の2つの書簡(1552年1月29日付と1552年4月付)である。これらの書簡に「日本のこれらの島々は8～9年前にポルトガル人によって発見された」とあり、1552年から逆算して1543年を導いている。

第③に、さらに1543年説を支える間接的根拠として、以下の諸点を挙げている。

まず第1に、フレイタスの情報によったエスカランテ報告には、琉球"発見"

の記事はあっても日本"発見"の記事が見当らないが、それはフレイタスが日本発見のニュースを入手していなかったのでエスカランテに語ることができなかったからである。もし1542年にポルトガル人の初来日が行なわれたとすれば、そのニュースが1544年初めシャムに届いていないのは奇妙である。

第2に、1544年に来日したペロ・ディエスの情報に、ポルトガル人の来日ラッシュと日本市場をめぐる中国人とポルトガル人との争いが記されているが、1542年に日本が"発見"されていれば、ポルトガル人の来日ラッシュは1544年にではなく1543年に起っている筈である、とみられる。

第3に、シュールハンマー師はルイス・フロイス(Luis Frois)の1578年10月16日付豊後発書簡およびジョアン・ロドリゲスの前掲『日本教会史』に拠って、1544年に初めて豊後に来航したポルトガル人と大友宗麟とのエピソードから、ポルトガル人が1543年に初来日したことが推測される、としている。

このように、シュールハンマー師は1542年説の根拠たるガルヴァンの記事を否定しエスカランテの記事を採ることによって、外国史料と日本史料との一年のずれを解消し、一つの有力な解決策を示した。このシュールハンマー師の1543年説はボクサー(C.R. Boxer)教授[15]やラック(D.F. Lach)教授[16]らに支持されるに至っている。本稿でも、以下においては、この1543年説に従って叙述を進めることにしたい。

(C) 国名としてのジャパンの一般化過程

さて、日本の国名についてであるが、この16世紀前半当時、中国南部沿岸地域の人々の間では、日本の名称として、トメ・ピレスの記しているJamponのほかにも、若干違った発音で呼ばれていたらしく思われる。

たとえば、ダミヤン・デ・ゴイスの『マヌエル王年代記』には、ポルトガル人の1517年の中国往訪に関連して、日本人が広東の島にやって来たことを記し、その日本人をJapongosという名で記している[17]。この書物は1562年に執筆され1567年に出版されているが、それは事件当事者の報告書類に基づいてそのままに記されているので、ここでは1517年当時の資料とみなすこととする。ここの

Japongos は日本人を、Japongo は日本国を指すものである。この Japongo は日本国に対する広東地方の音を訛った語であり、これから末尾の go を除けば Japon すなわち日本となる。またポルトガル語ではつねに最後の n は m に代えなければならないので、少し後には Japam と綴るに至り、さらに同音の Japão とも綴ることになった。この Japão が現在日本を呼ぶポルトガル語として一般的に使用されている。

つぎに、ジョアン・デ・バロス(João de Barros)の『アジア編年記』(Decada da Asia)の第1編に Japões が、第3編には Japam がみえる[18]。バロスのこの書の出版は、第1編が1552年に、第3編は1556年であったが、バロスが実際にこれらの諸編を編述したのは1530年代より40年代初にかけてであり、日本関係記事は1540年頃のポルトガル人の諸報告に拠ってほとんどそのままに書いている。したがって、これを1540年頃の資料とみなすこととする。バロスは第1編で中国近辺の地誌の概要を述べた際、「Lequios と Japões の諸島、またその大きさのために大陸であるかどうかを知らない Meaco(都)の州」に触れ、ポルトガル人の航海すべき国々の中に「Lequis および最終点として Japões 諸島、また Meaco の大州」を挙げており、第3編では「シンガプーラという海峡の上方の側を赤道線より北方へ航海する人々がいる。その土地のうちには Japam、Lequios、ルソンその他無数の島々……が含まれる。」と書いている。

バロスの記す Japões と Japam は、1540年頃の福建・広東の沿岸地方のどこかでポルトガル人の聞いた日本国名の訛称であるが、この Japam が現代の Japan の祖語であることは間違いない。なお Japões は Japão(発音は Japam と同じ)の複数形である。

当時中国へ赴いたポルトガル人は、日本の国情についてなお不正確なものを含む各種の風評を耳にしていたが、その国名についても、これまで挙げてきたように、色々な形に訛って伝えたのであった。

いずれにしても、ポルトガル人による1543年の初来日の直後には、すでに彼らポルトガル人の間では、日本を一般にジャパンと呼ぶことになっていたらしい。たとえば、1546年に鹿児島湾で交易した商人兼船長であるジョルジ・アルヴァレス(Jorge Alvares)がマラッカでフランシスコ・ザビエルのために書いた

日本報告で、日本を Japão と呼んでいる[19]。

こうして Japão がポルトガルの日本を呼ぶ称呼として一般化すると、ヨーロッパの他国民もこれに倣ったようである。まずスペイン人の例についてみると、前に触れたガルシア・エスカランテは少くとも1544年末から翌45年初にはモルッカ諸島のティドール島に滞在してディエスの日本往訪をふくむ日本情報を得ており、その後マラッカ経由で1548年8月にリスボンに帰着し、同地で遠征報告書をまとめ、メキシコ副王に送ったが、その報告書の中で、日本を Japan と称している[20]。彼らスペイン人ももはや日本をジパングとは呼ばなかった。この Japan はポルトガル語の Japão をスペイン語にうつした語であり、現在そのままに使われている。

イタリア語では1556年出版のジャコモ・ガスタルデの世界地図に載っているのが最初であろう[21]。その地図はヨーロッパで刊行された地図では、ジパングの名が消え Giapam の文字の現われた最初のものである。但しそのジャパン島は旧来の地図のジパングそのままであって、ただ名称を変えたにすぎなかった。ここにある Giapam というのは、ポルトガル語の Japão (Japam) をイタリア語綴りにした語であって、現代イタリア語で Giappone というのは、それから進化したものである。

以上のように、ポルトガル人がジャパンと云い出してから約10年にして早くもイタリアでこの語が使われているのは驚嘆に値する。このイタリア語を介して、ヨーロッパ諸国語にもみな Japan 系統の語が日本の名称として定着していったのである。

先に触れたマレー語の Japung も、ポルトガル人が初来日を果し、日本との交渉が頻繁となるにつれて、その重要根拠地の一つであるマラッカなどで一般化した Japão なるポルトガル語を介して、現地マレー人住民間にも採り入れられたものと考えられる。

IV. 16世紀ヨーロッパにおける新たな日本像の形成

(A) 新しい日本イメージ形成初期におけるフランシスコ・ザビエルの貢献

さきに触れたペロ・ディエスが1544年に日本訪問を果したと考えれば、彼の日本報告がヨーロッパ人によるおそらく最も初期の日本見聞記の一つということになろう。彼の語った日本往訪談は記録化されて、先述したエスカランテ報告書に採り入れられ、スペインのメキシコ副王に提出されたので、今日に残っている。

このディエスの日本報告には、日本の位置や日本人の容貌、風俗習慣、衣食住、貿易品などについて、それに前述した中国人とポルトガル人の抗争事件を含めて、実際の訪問者でなければ書けない事項が多く含まれており、日本の国情をかなり正確に伝えたものといえる。この報告によれば、日本はそれほど開発の進んだ国ではなく、牛と鋤による農業を中心につつましく生活している人々の住む島国である。この日本にはマルコ・ポーロの記述にみえたような黄金は少なく、代って銀が豊富に産出することが判明している。この点について同報告には、「彼(ディエス)はこれらの島(日本)で非常にわずかな金しか見なかった」とか、あるいはまた「彼ら(日本人)の富は銀で、小さな塊にして持っている。」[22]と書かれている。

しかし残念なことに、このディエスの日本報告は、広く16世紀のヨーロッパの人々に読まれて彼らの日本イメージの形成に大きく貢献した、という訳ではなかった。少くとも16世紀においては、それはスペイン政府を中心としたごく限られた人々に読まれたに過ぎなかったと思われる。

16世紀中葉に、多くのヨーロッパ人に読まれて、彼らの日本イメージの形成に貢献したという点で、最も重要な文献は、背名なフランシスコ・ザビエルの書簡類、とくに彼が来日後3カ月足らずの1549年11月5日付で鹿児島からゴアのイエズス会会友宛に出した書簡である[23]。この書簡はいわば彼の来日第1報であるが、これはヨーロッパにも伝えられ、ザビエルの使徒的精神とその活動を知り信仰の糧とするために宗教的文献として広く読まれ、通常これを「大書簡」と呼んでいる(本稿でも以下では「大書簡」と略称する)が、同時にそれは当時の貴重な日本情報としても広く利用されたのであった。

ザビエルは、この「大書簡」の作成において、彼が来日前に入手していた各

種の日本情報——すなわち、彼がマラッカで1547年12月に、ポルトガル人の商人兼船長であり、すでに日本に航海したことのあるジョルジュ・アルヴァレスに依頼して作成して貰った日本報告、さらにその後インドに移ってから、やはりザビエルの要請によって、1548年の夏から年末にかけて、日本人アンジロウに質問して情報を集め、それをゴアの聖パウロ学院の院長ニコラオ・ランチロット(Nicolao Lancilloto)師がまとめた4種の日本情報など——を利用したことは勿論であるが、ゴアからマラッカを経由し、1549年8月15日の鹿児島到着後は、それらの諸情報を確認するとともに、さらに自らの日本での見聞によって新情報を附加して作成したのである。

いま、ザビエルの「大書簡」の内容をその先行諸情報との関係に注意しながら、大きく幾つかの項目に分けてみてみよう。

まず日本の地理情報について、ザビエルは来日前に日本人アンジロウからミヤコ(京都)についての情報を得ていたが、来日後にそれをより一層詳細なものとし、バンドウ(坂東)すなわち関東地方についても新情報を蒐集してこの「大書簡」に盛り込んでいる。

つぎに、日本人の性格について、「大書簡」には親しみ易く、善良で、礼儀正しく、知識欲に富み、理性的な国民であると書いているが、こうした日本人像は、ザビエルが来日前にアルヴァレスやアンジロウの情報によって形成されていたが、その上に、ザビエルが来日後、武士階級との接触を通じて、彼らが名誉を重んじ、貧乏を恥とせず、武器を大切にすること、などの新しい情報を追加している。

つぎに、日本人の風俗習慣や生活様式について、ザビエルは、日本人は米・麦・魚を食べ、家畜を食べないが、食事には節制しており、賭博をせず、一夫一婦制を守り、健全で健康的な生活を送っていることを書いているが、その大部分はアルヴァレス情報によって来日前に明らかになっていた。ザビエルは来日後に、こうした情報を再確認し、さらに日本人の大部分の人が読み書きができること、老人が多いこと、などの新情報を書き加えている。

つぎに、日本人の宗教について、ザビエルは来日前にアルヴァレス、アンジロウ、ランチロットの情報によってかなり詳細な知識をもっていた。しかし、

この「大書簡」では、信仰の対象となるもののことや、ボンゾ(僧侶)の社会的役割やその性的乱れや生活上の問題点などについてしか記していない。宗教情報は、のちの彼の布教活動展開のうえでの基礎となる重要事項であるだけに、ザビエルは慎重に考えて、自らの調査をもっと長期間行なってから報告しようと考えていたので、来日第1報にはあまり詳しく書かなかったのではないかと思われる。

つぎに、経済情報についてみると、ザビエルはこれについてはあまり関心がなかったためか記述内容はきわめて少なく、日本の物産について野菜が豊富で果物の種類が多いことなどを簡単に記しているだけで、その記述内容もほとんどアルヴァレス、ランチロットなど来日前に得ていた情報に依存しているようである。

最後に、日本の対外関係について、ザビエルはとくに日本と中国との文化的・政治的関係の緊密な点について書いているが、このうち仏教が中国経由で伝来したことはすでに来日前にアンジロウからの情報によって知っていたことである。対外貿易については触れていない。

大略以上のような内容をもつザビエルの「大書簡」は、インドからヨーロッパに送られ、1552年(3回出版)を皮切りに53年(1回)54年(1回)59年(1回)と1550年代だけでも6回もヨーロッパ各地で出版され、16世紀中には合計35回も出版されたのであった。こうしたことから、この「大書簡」がヨーロッパ人の初期日本像の形成に大きな影響を与えたことは間違いない。

ザビエルのこの「大書簡」は、いわば現地調査に基づく日本人および日本の全体像をヨーロッパ社会に、事実上はじめて紹介したものであるといえるが、それが早期に多数回にわたって出版されたことは、それまで数百年にわたって伝えられてきた幻影に満ちたジパングとその住民像に代って、日本人が理性的国民であるとのイメージを広くヨーロッパ人の間に普及させるのに大いに貢献したものと思われる。

なお、ザビエルの「大書簡」の情報は、ヨーロッパの地図学のうえにも影響を与えている。たとえば、バルトロメウ・ヴェーリョ(Bartolomeu Velho)の「世界図」(1561年)は日本が単独に描かれた最初の地図として知られているが、これ

にはBandv(バンドウ)という地名が記されており[24]、「大書簡」を利用したことが明らかに看取される。

(B) 16世紀後半におけるポルトガルとスペインの対日関係

(1) ポルトガル交易船の来航とイエズス会の布教活動

前掲トメ・ピレスが記しているように、16世紀前半当時の日本は、産物の少ない貧しい国であったといってよい。それは当時アジアに進出したヨーロッパ人たちが熱望した香料とか黄金といった産物がなかったというだけでなく、一般的な産業生産水準においてもなお低い段階にあったといえそうである。

一方、当時の中国は物産の豊かさで知られ、その優秀な陶磁器は諸外国に輸出されていたが、日本にはそれに匹敵する窯業は興っていなかった。また当時の日本農業は稲作主体で、米の生産も国内需要を充すのが精一杯というところであった。日本での絹の生産は江戸時代中期以降に発展したが、16世紀初においては中国からの輸入に依存していた。

ところで、16世紀前半当時、日本と中国の間の貿易通商にとって好ましからざる情勢が生まれつつあった。すなわち、16世紀前半、いわゆる後期倭寇の活動が激化したため、明朝の海禁(中国人の海外通交を禁止する)政策が厳しさを増し、日中両国間の官営貿易が困難になってきたのである。かくして公貿易の面では、遣明船による勘合貿易は1541年をもって終り、また私(密)貿易に対しては、1547年に中国で朱紈が浙江巡撫に任ぜられて厳重な取締りが行なわれ始めた。この(1547)年、大内氏の遣明船が中国沿岸に到達したが、上陸を許されずに帰国している。

こうした状勢下に、日明間貿易の空白をついて、その仲介貿易者として立ち現われたのがポルトガル人であった。彼らは前述したように、マラッカ占領直後から中国進出を図り、中国政府の海禁政策に阻まれて中国本土上陸は果せなかったものの、中国東南沿岸部諸地域での密貿易を行なっていたが、1557年にマカオ(Macao)の居住権を中国側から認められると、ここを基地として対日貿

易に積極的に乗り出していった。

1543年の初来日以来、対日接触はこの時まで13年を経過していたが、この頃までに多くのポルトガル商船が日本南部の港に入港していた。ポルトガルは、そのアジア進出の初期から、この地域での貿易を原則的に国王の独占的経営下においていたが、1550年頃からはその対中国・日本貿易を国王またはゴア総督の任命する航海と貿易の総責任者としてのカピタン・モール(Capitão Mor)の統制下に運営することとした[25]。ポルトガルのアジア支配の中心地たるゴアとマカオ・平戸(のちに長崎)を結ぶ貿易は、このカピタン・モール制の管轄下におかれ、毎年600ないし800トンの帆船(ナウ)がほぼ一艘ずつ、時には1、2艘のジャンクを伴なって来航するのが慣例であった。

このカピタン・モール制のもとで、ポルトガル船は中国の生糸や絹織物を日本に運び、代価を銀で受け取り、その日本銀を日本においてよりも対金比価の高い中国で売却することによって、巨利を博したのである。この日中間仲介貿易によって、マカオ在住のポルトガル商人たちも大きな利潤を得た。船荷の絹は彼らの投資によるものであり、カピタン・モールはその莫大な利益の上前をはねたのである。利益の分配にあずかったのは決して商人たちだけでなく、カトリック教会(イエズス会)もまた同様であった。

アジアにおけるポルトガル帝国の勢威は、16世紀後半に至って次第に衰退の兆しをみせるに至り、たとえば、その重要な支配地域の一つである香料諸島で、1575年に現地スルタン勢力の反抗によって丁香生産の中心地テルナテ島を失なうという事件が起っているが、これによってもポルトガルは決定的な打撃を蒙るという事態には至らなかった。当時のポルトガル人たちは、対ヨーロッパ貿易すなわちアジアの香辛料をヨーロッパに運ぶ貿易よりも、アジア地域間貿易すなわちインド洋や東アジアでの仲介貿易によって、より大きな利益をあげていたのである。日本から得た銀で、ポルトガル人たちは中国から絹・陶磁器・銅などを買い、それらをインドで売却し、代りにインド各地産の木綿や綿織物を買い、それをマラッカやモルッカ諸島をはじめ東南アジア各地に運んで胡椒や丁香・肉荳蔻など香辛料との交換にあてた。

日本・マカオ間の貿易は、このようにポルトガルの貿易活動にとってはまこ

とに重要な地位を占めていた。マカオが17世紀に入ってオランダ人の攻撃をたびたびうけながらも、ポルトガル人がそれを死守したについては、このような背景があったのである。

16世紀後半当時の日本は、中国からの新技術の導入によって、世界有数の銀産国になっていたが、日本国内の主として上流階級の嗜好を満足させるために買付けられた絹の代価の銀は、年間50万～60万クルザード(2万ないし22,500キログラム)に達したという[26]。この額は年々上昇し、17世紀初頭になると、日本から海外に運ばれた銀は、年間15万キログラムにものぼったと推定されている[27]。

こうして日本は、中南米の場合とは異なり、征服によってではなく、貿易を通じてヨーロッパ勢力、実態的にはポルトガル人と最初に接触することになった。しかし、それは自由な貿易ではなく、国家経営による独占貿易であった。またこの貿易と表裏一体となって展開されたカトリック教会の布教活動もイエズス会による独占事業であった。しかも、そのイエズス会の活動は同時に、ローマ教皇の承認のもとで、ポルトガル国家によって支えられていた。日本の門戸を最初にヨーロッパに向って開かせた世俗と教会の二つの独占事業は、ともにポルトガル勢力によって掌握されていたのである。

では、この16世紀後半当時、アジアにおけるスペイン勢力の活動はどうなっていたのだろうか。また何故スペイン勢力はポルトガルのように積極的に日本に進出しなかったのであろうか。これらの点について、次に考えてみたい。

(2) スペインのフィリピン領有と制限された対日活動

スペインのアジア進出は、1521年のマゼラン船隊によりフィリピンおよび香料(モルッカ)諸島到達によって、その第一歩が印された。以後スペインは香料諸島の領有をめぐってポルトガルと争うことになった。しかし当時ポルトガルはすでに香料諸島に勢力を扶殖しており、当地ではスペインよりずっと優位な立場にあった。しかもポルトガル側にとっては、スペインの香料諸島への進出は、両国の勢力範囲を定めたトリデリシャス条約への違約以外の何ものでもなかった。勿論スペインは、香料諸島がトリデリシャス条約で定めたポルトガル

の勢力範囲内にあるとするポルトガルの主張を認めなかった。かくして両国は1520年代を通じて香料諸島の領有をめぐって争ったが、結局1529年、スペインはポルトガルとサラゴサ条約を結んで、香料諸島の権利を35万ドゥカードと引換えに譲り渡してしまった。しかし、その後もスペインはたびたび香料諸島に船隊を送り、失敗を重ねながらも、其地への進出をなかなか諦めなかった。

アメリカ大陸の征服・植民地化とマゼラン海峡の発見は、スペインに太平洋への進出を可能にさせたが、折角アジアまで航海しても、また元の起点(メキシコ)まで東航できないという航海技術上の難点を解決できず、アジア進出はなかなか実現しなかった[28]。

やっと1565年に至って、この問題が解決された。この年、ミゲル・ロペス・デ・レガスピ(Miguel Lopez de Legaspi)とアンドレス・デ・ウルダネータ(Andres de Urdaneta)は、メキシコからフィリピン諸島まで航海し、セブ島にアジアで最初のスペイン人の町を建設した。そしてその直後、同年6月に、ウルダネータはセブを出帆し、北東貿易風を避けながら北緯42度辺り(日本近海)まで北上してから東進するという、いわゆる大圏航路により、10月初にメキシコのアカプルコ港に到着することができた。これによって太平洋の往復航海がはじめて可能となり、レガスピが1571年にルソン島に首都マニラ市を建設して間もなく、アカプルコ・マニラ間の定期航路が開かれた。

レガスピがマニラ市を建設し、いよいよ本格的なフィリピンの植民地経営に乗り出してから、スペイン人がアジアで最も関心を寄せたのは中国との交易であった。明朝の海禁政策が1567(隆慶元)年に至って、一部南海方面への出航貿易に限って解除されたこともあって、マニラの建設以後、中国商船のフィリピン来航が年ごとに増加したが、これら中国船には陶磁器や絹織物など種々の中国産品が積載されていた。マニラのスペイン人は、この中国産品をアメリカ新大陸へ再輸出して中間利潤を稼ぐことを考えたのである。

メキシコとフィリピンは、前述したようにウルダネータが開発に成功した航路によって、大型帆船(ガレオン)で結ばれた。ガレオン船は、一年に一度、数カ月から10カ月もの日数をかけて、マニラとアカプルコの間を往復した。マニラのスペイン人は、このガレオン船に、中国産の生糸・絹織物や陶磁器・工芸

品などを積込んでアカプルコへ送り、新大陸で豊富に産出する銀と交換した。そうして入手した銀で中国船がマニラに輸入する生糸や絹織を買いとって、それらを再びガレオン船によってメキシコに送り出し、莫大な収益を得たのである[29]。ガレオン貿易は1572年に開始され、1815年まで続くことになる。

このように、ガレオン貿易を通じてスペイン人は中国を中心とする東アジア市場に銀を供給したが、このことは、前述したようなポルトガル人による日本からの大量の銀の持ち出しとその中国などアジア市場への流出という事実を想起すれば、当時の中国経済あるいはアジア経済を考えるうえで、まことに興味ある現象だといえる。アメリカ銀と日本銀が大量に放出されて、当時の中国をはじめアジア諸地域の流通経済を飛躍的に進歩させていた訳である。

さて、マニラのスペイン人は、このようにガレオン貿易によって充分銀を供給されており、また貿易の利益をあげていたこともあり、経済的には日本への進出をそれほど熱望していた訳ではないと思われる。もっとも、日本との経済関係は、日本からの私貿易船のフィリピン来航によって、事実上維持されていた。この時代のフィリピンから日本への輸出品の一つとして、有名な「呂宋の壺」があった[30]。

しかし一方、マニラのスペイン人は、貿易よりもむしろ布教活動のうえから対日進出に大いに熱意をもっていたように思われる。当時のスペインは、ポルトガルがイエズス会を保護したのと同様に、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチン会などの活動と密接な関係をもっていたが、マニラ在住のこれらカトリック諸派の宣教師たちは、かねてイエズス会に対抗して日本での布教を熱望していた。そして偶発的な契機によって、マニラから出航の商船が1584年6月に日本の平戸港に入港し、同船搭乗のスペイン人宣教師たちが領主松浦氏から歓待をうけ、且つ同地への再訪の歓誘をうけて帰国した際には、また翌年、松浦氏がマニラに船を派遣して平戸への来訪と貿易を促した[31]際には、マニラの宣教師たちは早速にも日本布教を行なうべくその準備を始めたのであった。しかし、現実には彼らが日本布教を容易には実行しえない事情が存在していた。

スペインがフィリピンの植民地経営に乗り出して間もなく、1580年にはポルトガルの王統が絶え、スペイン国王フィリップ2世がポルトガルの国王を兼任

することになった。しかし、このことは両国の合併を意味するものではなく、両国政府は従来通り、独立して別個に存続し続けた。ただ両国が同一人を国王として推戴したにすぎない。ところで、こうしてポルトガル国王ともなったフィリップ2世は、日本との貿易をポルトガル人に限り、日本への布教をイエズス会に限ることを承認していた。この布教権の規定は本来、ローマ教皇グレゴリオ13世(1572～85年在位)が1585年1月28日日付で発布した勅令に、もし教皇の許可なくイエズス会以外の宗派が日本での布教活動を行なえば、その者を破門に処すると規定したものを、フィリップ2世がポルトガル領東インドのイエズス会保護者の資格をもって追認したものであった。

こうした事情から、フィリピンのスペイン人たちは、独占的なポルトガル人の対日貿易やイエズス会の布教活動に対しても傍観を続けざるをえなかったのである。

彼らにとっての好機は、豊臣秀吉が朝鮮を経由しての明朝中国の征服を計画し、その一環として1591年にフィリピン総督に降服を勧告する使節を派遣してきた時に訪れた。この降服勧告に驚いたフィリピン総督はフワン・コボというドミニコ会士を特使として日本に送り、さらに1593年にはフランシスコ会士のペドロ・バプチスタらを、翌94年にはフランシスコ会のヘロニモ・デ・ヘズスらを秀吉の許に派遣した。バプチスタらスペイン系修道士たちは、この機会をとらえて、人質という名目で残留した日本で公然と布教を開始したが、そのことが日本で活動中のポルトガル系イエズス会には不当な既得権侵害と受けとられた。

さらにその上に、有名なサン・フェリペ号事件が起って、イエズス会と他宗派間の対立が激化することとなった。

サン・フェリペ事件とは、1596年フィリピンからメキシコに向うスペインのガレオン船サン・フェリペ号が難破して土佐の浦戸港に入港した時発生した日本・スペイン間の紛糾であるが、このとき秀吉が現地に派遣した増田長盛に対して、同船の水先案内人が、スペインの世界領土の広大さを誇示し、布教と武力征服の協力によってその成果を得た、と説明したという。これは事実か否かは判然としないが、当時京都にいたポルトガルのインド副王の使節ペドロ・マ

ルティンスらが、マニラからのフランシスコ会・ドミニコ会の日本進出を不快に思っていたところから、秀吉に対してメキシコ、ペルー、フィリピンを武力征服したスペイン人に注意するよう警告した。その結果起ったのが、1597年2月のバプチスタらスペイン系宣教師6名をふくむ合計26人のキリスト教徒の処刑(26聖人殉教事件)であった[32]。こうして、16世紀におけるスペインの対日接近の試みは悲劇のうちに終結をみたのである。

(C) 16世紀末のヨーロッパにおける日本像

16世紀後半における、上述したようなポルトガル、スペイン両勢力の対日接触を通じて、日本の実情はヨーロッパ人の間にもかなりよく知られるようになった。そうしたヨーロッパ人による16世紀末の日本についての総合的観察記録として、1585年にローマで出版されたメンドーサ(Ioan Gonzalez de Mendoça)著『シナ大王国誌』の日本関係記事、および1596年にアムステルダムで出版されたリンスホーテン(Jan Huygen van Linschoten)著『東方案内記』にみえる日本関係記事、の2つが挙げられる。

これらアジアについて書かれた両書は、ヨーロッパ読書界において大きな反響をもって迎えられ、広く読まれた。前者の『シナ大王国誌』[33]は1585年にローマでスペイン語版が最初に出版されたが、翌86年にはイタリア語訳が、88年にはフランス語訳と英語訳が、そして89年にはドイツ語訳とラテン語訳が出版されている。一方、後者の『東方案内記』[34]は1596年にアムステルダムでオランダ語版が最初に出版されたが、2年後の98年には英語訳とドイツ語訳が、翌99年にはラテン語訳が、そして1610年にはフランス語訳が出版されている。このように両書がヨーロッパで広く読まれたについては、16世紀の80年代から17世紀の初頭にかけての時代が、スペイン国王によるポルトガル国王兼任(1581)、イギリス艦隊によるスペイン無敵艦隊の撃滅(1588)、各東インド会社の設立に象徴されるようなイギリス・オランダによる東洋への進出開始、などのことがあり、ヨーロッパで東アジアに対する関心が非常に高まった時期に当っていたことも大いに関連があったと思われる。

さて、これら両書で、日本と日本人はどのように描かれているのだろうか。まず『シナ大王国誌』の場合について検討してみよう。

著者メンドーサは、アジア訪問の経験なく、メキシコで各種資料に依拠してその著『シナ大王国誌』をまとめたが、とくに同書の日本に関する部分(第2部、第3巻、第14章)は、主として、フランシスコ会士マルティン・イグナシオ・デ・ロヨラが、メキシコからフィリピンに渡り、1582年には広東に滞在し、その後マラッカ(83年1月に到着)・インド・喜望峰を経て、84年8月にリスボンに帰着するまでの経験をまとめた『新世界旅行記』から採ったとされるが、現在ではその旅行記の原文は失なわれてしまっている。

いま、こうした背景のもとに書かれた『シナ大王国誌』の日本関係記事をみると、まず日本の地理的概況について、

「ハポン(日本)の島々―それらは数が多く、全部が合わさって―大国を形づくり、多数の領主(セニョール)たちによって分割されている―は、チナ大陸から300レグア(約1,700キロ)距った位置にある。」(35)

と書いており、すでにかなり正確な知識をもっていたことがわかる。

つぎに日本人の容貌や性格について、

「住民は容貌や体つきはチナ人たちとあまり変らないが、チナ人ほどに人柄は上品でない。」(37)

「(住民たちは)チナ人ほどではないけれども、人あたりがよい。」(37)

「この諸島の住民たちの才知は生来(立派で鋭いものであるにもかかわらず)、戦闘・掠奪・悪事を好むものとして知られている。」(38)

「このこと(国内で戦争が続いていること)と、また彼らが武芸と掠奪を絶えず行なっている結果、彼らが好戦者であるという評判が生じ、近隣諸国に恐怖を与えている。」(39)

と書いており、国内での戦乱続きや国外での倭寇の活動などからの連想によってであろうが、日本人を好戦的な民族だとしている。

つぎに経済状況についてみよう。まず農業生産について、

「米・肉を大量に産出し、場所によっては小麦の収穫もある。しかしこのような産物があり、また沢山の果物や野菜類、そのほか日常食用にするものを

種々産するにもかかわらず、ハポン人たちは近隣諸国の人たちほど物資が豊かでない。その原因は土地に欠陥があるからではなく(何故なら地味はすこぶる良質で肥えているからだ)住民が耕作や播種よりも戦争に熱中しており、農耕に精を出さないからである。これこそ彼等自身が、ならびにこの諸島に入国したことのある人々が述べているように、この国において時々食糧の不足を来す原因なのである。」(40)

とあり、戦争がなければ食糧自給が充分可能であるのに、戦乱のために時々食糧不足を来すことがあるという。

つぎに鉱業生産については、

「銀を大量に産出するが、われわれの新大陸のものほど良質の銀ではない。」(41)

と書いていて、日本が銀産出国として知られていたことが判る。16世紀後半の日本では、前述したように銀が大量に産出し、それが貿易品として中国など海外に持ち出されたことから、近隣アジア在住のスペイン人の間でもその事情はよく知られていたのであろう。

つぎに日本人の信仰については、

「われらの主キリストの信仰は、この諸島の幾つかには大いに普及している。これはイエズス会の修道士たちの非常な熱意と努力によるものである。なかんずく、(同修道会の創始者イグナシオ・デ・ロヨラ師の12人の同志のひとりである)聖フランシスコ・シャビエル師がこの事業に注いだ熱意のたまものである。この聖者は絶大なる情熱を傾けてこの諸島の改宗に力を尽し、これらの住民たちが陥っていた悪魔と奴隷状態からついに島々を解放してやった。」(42)

「ポルトガル人たちの言によれば、いまだ改宗していない人たちの数に比較すると、受洗者の数はごく僅少である。」(43)

「上記の神父たちのすぐれた説教と手本のおかげで、ハポン人は東インドの住民よりは立派なキリスト教徒になっている。」(44)

とあって、ザビエルの布教開始以後、イエズス会士の活動によって、日本人のなかからキリスト教への改宗者が出始めている事情が語られている。こうした東アジアに位置する異教の国日本でのキリスト教布教活動の進展というストーリーは、当時のヨーロッパの人々にも興味と共感をもって読まれたことであろ

う。

なお、本書の日本記事には、本書執筆当時(1580年代半ば)の日本が、前述したように、ポルトガルの独占的活動範囲内にあったため、本書の執筆者をふくめてスペイン人が全く日本に接触できず、ただポルトガルの対日活動を傍観していなければならないという立場から来る苛立ち・批判というものが随所に見られる。たとえば、日本の一層のキリスト教化を進展させるために、イエズス会以外のスペイン系諸宗派の布教活動をも認めるべきだと論じていることや[45]、また日本への接近ルートの長さについても、スペインによるスペイン本国—メキシコ—太平洋ルートの方が、ポルトガルによるポルトガル—喜望峰—ゴア—マラッカ—マカオのルートよりも半分以下の距離で到達できる、などと云っている[46]のはその例である。

つぎにリンスホーテン『東方案内記』の日本関係記事について検討したい。リンスホーテンは本書執筆に際して、彼自身のポルトガル支配下のゴア滞在(1583年～88年)中に得た経験と資料を中心に、各種地域別文献を利用しているが、この日本関係記事の執筆に際しては、とくに①ザビエルはじめイエズス会士が日本から送った書簡類、②前掲メンドーサの『シナ大王国誌』の日本関係記事、③ヨーロッパ往復の途次(1583年、87年)にゴアに立ち寄った日本の天正遣欧少年使節一行から得た情報やその見聞、などに依拠するところが大きかったと考えられる。

では、リンスホーテンが『東方案内記』において、日本をどのように描いているか、みてみよう。

まず日本の地理概況について、

「ヤパン〔日本〕島すなわちヤパン国は、相寄り合った多くの島から成っており、ただ幾つかの小さな湾ないし河によって分け隔てられているだけで、一つの大きな国である。もっとも、その大きさについては今もって確かなことはわからない。全体がまだ発見されておらず、未知のところがあって、ポルトガル人からもまだ報告がないからである。

ヤパン国は北緯30度に始まって38度以上にまで及んでおり、シナ大陸の東方80マイルに横たわり、マカウからはポルトガル人が北東へ航行しておよそ

300マイルの道のりである。」[47]

と書かれていて、ポルトガル人が接する西日本の地理はかなり明らかになったものの、東日本についてはなお不明の点が多いといった状況を反映した書き方になっている。

日本人の性格について、

「(ヤパン人が)きわめて俊敏で、物事をすみやかに学び取ることは、ポルトガル人がこの国を発見して以来、経験によって明らかにされてきたところである。」[48]

と書いていて、ザビエル以来の日本人＝理性的国民像を受け継いでいる。リンスホーテンはまた、日本人の性格として忍耐強さを挙げ、次のように書いている。

「ヤパン人は万事においてきわめて忍耐強い。というのは、幼少のころから飢え・寒さ・あらゆる労働を耐え忍ぶことを仕込まれているからで、冬でも夏と同じ薄着をして無帽で歩いている。一般民衆のみならず、国の要人らもそうである。」[49]

これによると、日本人の忍耐強さは低水準の生活を強いられたことから生まれた性格だということになる。

つぎに経済状況については、

「若干の穀物畑があるが、住民の常食は米である。彼らは狩猟によって暮らしていくすべを驚くほどよく心得ており、野生の獲物以外の肉を食べない。……かれらはまた、牛乳を、われわれが生血におびえるようにひどく嫌う。……多種多様の魚がいて、彼らは魚を大いに好む。また、シナと同様に、あらゆる種類の果実がある。」[50]

と書いているが、これによると、日本人は自然経済に依存し、あまり恵まれた経済生活を送っているようには思われない。

鉱業生産については、

「この国には幾つかの銀山があり、ポルトガル人が毎年その銀をシナへ運んでいってヤパン人の必要とする絹その他の品物と交換する。ヤパン人は銀を探して売却するのが実に巧妙である。」[51]

と書かれており、16世紀末において、日本産出の銀がその重要貿易品として、中国産の生糸・絹などと交換に、大量に中国に輸出されていたこと、そしてその仲介貿易の担当者が主としてポルトガル人であったことは、広く国際的にも知られたところであったので、メンドーサと同様、ここにも書き留められたものと思われる。

なお、日本人がいわゆる倭寇として、中国沿岸地帯を襲い掠奪行為をしていたことも、リンスホーテンによって書き留められている(52)。

つぎに、リンスホーテンが16世紀末の日本で、イエズス会の布教活動によって、キリスト教化が進み、仏教徒からキリスト教徒への改宗者の数が日々増加しつつあると書いているのも、メンドーサの描写と同様である。この点について、リンスホーテンは、

「かれらの宗教はシナ人のそれとほとんど同じである。偶像と、かれらが大変尊敬するボンズ(坊主)と称する司祭職をもっている。イエズス会士らが来てからというもの、彼らの多くが洗礼を受けてキリスト教徒となり、その数はなお日ごとに増えつつある。」(53)

と書いている。

ただ、リンスホーテンは、日本でのキリスト教化の進展を喜びつつも、新教徒オランダ人としての自覚を高めつつあって、そうした立場から、日本でのイエズス会の独占的布教活動を痛烈に批判するのである。その点について、リンスホーテンは次のように書いている。

「彼ら(イエズス会士)は、この国(＝日本)のほとんど全土を支配下におさめている。すなわち僧俗を問わず、この国をあげてキリスト教徒に改宗させるために、ヤポン人を思いのままにたぶらかし、そして、神々のごとくに崇拝されているのである。……

彼らは懇願と二枚舌の偽善をもって相手を魔法にかけているかに見える。いやそれどころか、商売、交易においても、手形などを使って巧妙に立ちまわり、あらゆる世俗の人を凌駕するほどである。要するに、インディエ全土にわたって、どんな場所でも、彼らがそこへ割り込んで来る限り、ことごとく収奪されてしまうのである。それ故、他の修道会ならびに修道士からも、

また一般民衆からも、彼らの貪欲と偽善の極悪非道に堪えかねて、苦情のささめきが起こり始めている。」[54]

これによると、16世紀末のアジアにおける「貪欲と偽善と極悪非道」に満ちたイエズス会は、したがってまたそれを保護するポルトガルの支配体制は、できるだけ早期に打倒しなければならない存在ということになる。リンスホーテンが『東方案内記』を執筆した真の意義は、まさにこうしたポルトガルのアジア支配の実態を剔出し、新教徒的倫理感によって、その支配体制打倒の正当性を合理化するところにあったといえるのである[55]。

以上のようなメンドーサ『シナ大王国誌』とリンスホーテン『東方案内記』の記事内容の検討から、16世紀末のヨーロッパにおいて、日本は銀の産出国として知られ、また国民は理性的であるが、大多数の日本人が仏教徒である中で、少数ながらキリスト教に改宗する人が出始めていることが注目されていたと思われる。なお、日本人の礼儀正しさや賢明さについては、前記の天正遣欧少年使節たちが、ポルトガル、スペイン、ローマ、イタリアなどの諸国を訪問した際の行動を通じて、当時のヨーロッパ人たちも強く印象づけられたところであり[56]、そうした日本人論を含んで彼ら日本少年使節に関する書物が使節一行がローマ・イタリアに滞在した1585年だけで49冊、同年から1593年までに合計78冊がベネティア、ローマ、ミラノ、フィレンツェ、パリ、ルーヴァン、アウグスブルク、デュセルドルフ、プラハなどヨーロッパ各地で出版されたのであった[57]。これらの書物によって、ザビエル以来の日本人＝理性的国民像が、一層強くヨーロッパ人の間に印象づけられたものと思われる。

V. 結　　語

ヨーロッパ人の日本初渡来は、アフリカはもちろん、アメリカやアジアの他地域に比べてかなり遅かった。ポルトガル人の種子島漂着は、バスコ・ダ・ガマによるインドのカリカット到着から45年後、アフォンソ・ダブルケルケのマラッカ占領から32年後であった。スペイン人のやはり偶発的に行なわれた日本(平戸)初来航は、コロンブスのアメリカ到着から92年後、マゼランの太平洋航

海から63年後のことであった。

オランダ・イギリスとの接触が17世紀初頭になってからと遅いのは、これら両国がアジア航海に関しては後発国だから当然といえるが、香辛料や黄金の入手を目指して虎視眈々としていたポルトガル、スペインの両国が、半世紀から１世紀近くにわたる長期間、日本に未着であったのは、彼らヨーロッパ人のマルコ・ポーロに対する高い関心や、コロンブスのジパングへの夢などを考えると、一種不思議な気さえするが、要するに、最初に東アジアに到達したポルトガル人にとって、日本が経済的にあまり魅力的な存在ではないと考えられたことに起因することは事実なのである。

しかし、一旦日本すなわちジャパンに到着するや、ポルトガルはその商業活動における独占的交易場として、また独占的布教地域として、対日活動を展開するに至った。彼らがそうした諸活動を行ない得たのは、日本での銀の入手に依存するところが大きかった。

一方、このポルトガルと対立・抗争し、対日接近でもポルトガルに先を越されたスペインにとって、みずから他所に銀の入手先をもったこともあって、日本は経済的取引対象としては、それほど魅力的なものではなかったが、ただその宗教活動の展開上、日本がポルトガルの保護するイエズス会の独占的布教地域に指定されていたために、自勢力下のカトリック諸宗派の活動を阻止されており、フィリピンという近隣地域に根拠地をもちながら、ただ手を拱いてポルトガルの対日活動を見守るほかなかったのである。

そこで、彼らスペイン人は、おそまきながら1590年代に入って、一たび対日進出の好機が与えられるや、猛然とその宗教活動を展開するに至ったが、やがてその強引さが祟って、宣教師殉教事件という大きな悲劇を迎えることとなり、スペインの対日接近の試みは16世紀末に一旦完全に挫折した。

16世紀後半のヨーロッパ人のジャパンすなわち日本に対するイメージは、こうしたヨーロッパ諸勢力の初期の日本進出状況を反映して、経済的には銀の産出国として注目され、一方宗教的には、理性的国民の多い中で、キリスト教化が次第に進みつつある国として興味を持たれた。日本についてのこの二つの特徴は、同時代人としてのポルトガルの世界的詩人カモンイスの大叙事詩『ウズ・

ルジアダス』のなかでも、「だが自然がとくに名をえたく思った海上の島じまを忘れてはならぬ。その半ばかくれており、渡航のおりの拠点をなすシナと向かいあう島はニッポンだ。そこには良質の銀を産し、神のおきてで光をえるだろう。」[58]と謳われていた。

16世紀は、わが国が、ヨーロッパ人のイメージの中で、かつてマルコ・ポーロが紹介した幻影に満ちた黄金の国ジパングから実像としての銀の国ジャパンへと変貌をとげた世紀であったのである。

注

(1) 『マルコ・ポーロ旅行記』のテキストは数多くあって、固有名詞の綴りもかなり相違がみられる。ジパング(Zipangu)はラムジオ本に、チパング(Chipangu)はベネデット集成本にみられる。以下本稿では、引用文を除いて、便宜上、すべてジパングと書くこととする。

(2) マルコ・ポーロ著愛宕松男訳注『東方見聞録2』平凡社東洋文庫、1971年、130ページ。

(3) コロンブスの航海については、林屋永吉訳『コロンブス航海誌』、岩波文庫、1977年、および増田義郎『コロンブス』岩波新書、1979年、参照。

(4) アントニオ・ピガフェッタ著長南実訳「マガリャンイス最初の世界一周航海」大航海時代叢書、第1期第1巻『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン　航海の記録』所収、岩波書店、1965年、526ページ。

(5) 岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』改訂増補版復刻本、東京、1974年、34ページ。

(6) 同上書、34-35ページ。

(7) トメ・ピレス著生田滋、池上岑夫、加藤栄一、長岡新治郎訳注、『東方諸国記』大航海時代叢書第5巻、岩波書店、1966年、250-251ページ。

(8) H. Yule & A.C. Burnell, *Hobson-Jobson. A Glossary of Collquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*. New Edition, London, 1903, p.451.

(9) G. Schurhammer, S.J., *Francis Xavier: His Life, His Times, Vol.IV. Japan and China 1549-1552*, Rome, 1982, p.553, n.35.

(10) 岡本良知「Japanといふ語の由来」『キリシタンの時代—その文化と貿易—』東京、1987年、465-480ページ。
(11) 岡本良知、前掲『十六世紀日欧交通史の研究』79ページ。
(12) 原文にはジェプエン Jepuen となっているが、これは誤解で、他の個所では「福建・広東の卑俗語で Jipon となる」と述べている(第4章、邦訳182ページ)ので、正しておいた。
(13) ジョアン・ロドリーゲス著佐野泰彦、浜口乃二夫、江馬務、土井忠生訳注『日本教会史 上』大航海時代叢書第九巻、岩波書店、1967年、182ページ。
(14) 岸野久『西欧人の日本発見』東京、1989年、30-32ページ。シュールハンマー論文の原題は次の通り。G. Schurhammer, "O descobrimento do Japão pelos portugueses no ano de 1543", *Anais da Academia Portuguesa da História*, 2. Série, Vol.I, Lisboa, 1946.
(15) C.R. Boxer, *The Christian Century in Japan, 1549-1650*, Second edition, Berkeley, 1967, pp.31-32.
(16) D.F. Lach, *Asia in the making of Europe*, Vol.I, Book II, Chicago, 1971, pp.655-656.
(17) 岡本良知、前掲「Japanといふ語の由来」475ページ。
(18) 同上、476ページ。
(19) 岸野久、前掲『西欧人の日本発見』末尾所載の複写資料〔2〕の(2)による。
(20) 同上書、25、28ページ。
(21) 岡本良知、前掲「Japanといふ語の由来」479ページ。
(22) 岸野久、前掲書、28-29ページ。
(23) シュールハンマー&ヴィッキ編河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』所収、東京、1985年、464-502ページ。
(24) 岸野久、前掲書、233ページ。
(25) C.R. Boxer, *The Great Ship from Amacon: Annals of Macao and the Old Japan Trade, 1555-1640*, Lisboa, 1959, pp.IX, 8-11.
(26) リンスホーテン著岩生成一、渋沢元則、中村孝志訳注『東方案内記』大航海時代叢書Ⅷ、岩波書店、1968年、250ページ注4。
(27) 岩生成一『朱印船貿易史の研究』東京、1958年、329ページ。
(28) O.H.K. Spate, *The Spanish Lake*, Canberra, 1979, pp.87-109.
(29) W.L. Schurz, *The Manilla Galleon*, New York, 1939.
(30) 岡田章雄『バテレンの道』京都、1970年、222-224ページ。
(31) 同上書、216-219ページ。
(32) 片岡彌吉『日本キリシタン殉教史』東京、1979年、91-112ページ。
(33) Juan González de Mendoza, *Historia de las casas mas notables ritos y costumbres del Gran Reyno de la China ...*, Roma, 1585. ゴンサーレ

ス・デ・メンドーサ著長南実訳矢沢利彦訳注『シナ大王国誌』大航海時代叢書VI、岩波書店、1965年。

(34) Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario, voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Portugaele Indien*, Amsterdam, 1596. リンスホーテン著岩生成一、渋沢元則、中村孝志訳注『東方案内記』大航海時代叢書VIII、岩波書店、1968年。

(35) 前掲『シナ大王国誌』553ページ。

(36) 同上書、554ページ。

(37) 同上書、558ページ。

(38) 同上書、557ページ。

(39) 同上書、555ページ。

(40) 同上書、554ページ。

(41) 同上書、554ページ。

(42) 同上書、556ページ。

(43) 同上書、557ページ。

(44) 同上。

(45) 同上書、557-558ページ。

(46) 同上書、553-554ページ。

(47) 前掲『東方案内記』249ページ。

(48) 同上書、251ページ。

(49) 同上書、251-252ページ。

(50) 同上書、249-250ページ。

(51) 同上書、250ページ。

(52) 同上書、252-253ページ。

(53) 同上書、258ページ。

(54) 同上書、261-262ページ。

(55) 同上書、39ページ。

(56) 松田毅一『南蛮巡礼』中公文庫、1981年、241ページ。

(57) A. Boscaro, *Sixteenth Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe: A Descriptive Bibliography*. Leiden, 1973, p.XVI.

(58) ルイス・デ・カモインス著小林英夫他訳『ウズ・ルジアダス』東京、1978年、411ページ。